來るであらう。

又、成道後の釋尊が所證の法の甚深微妙にして極めて難解なるを思念し給ふことを述べる場合、その所證の理(thāna)は經律[5]の上に緣起(paṭiccasamuppāda)と涅槃(nibbāna)との二つとして示されてゐる。そして緣起は相依性(idappaccayatā)を以て說明せられ、涅槃は一切行の寂止・一切依の捨離・愛盡・離貪・滅をもつて說明せられてゐる。緣起の逆觀はそのまま愛盡涅槃の理を表はしてゐるから、緣起の他に涅槃を立てることは重複のやうであるが、しかしここで緣起と言うたのは、相依性なる語によつても解るやうに、一切法因緣生の意味の方を强く見てゐるのであらう。一般に、相依性をもつて解釋せられた緣起は、この側に屬する。

註

① 相應部一二・二七、二八、三三等。

② 例へば五蘊について言へば、色の集は食の上に、受・想・行の集は觸の上に、識の集は名色の上に見出されてゐる。（相應部二二・五六）

③ この種の經典は非常に數が多い。代表として雜阿含一・一を擧げることが出來る。

④ 相應部一二・一七、一八（同一二・二四——二六參照）。

⑤ 相應部六・一、長部一四（二卷三六頁）、大品一・五。

（未　完）

昭和二十五年度春季公開講演會

「敎」の眞理性と救濟の成立　本學敎授　稻葉秀賢氏

近代に於ける人間の狀況　京大助敎授　野田又夫氏

學會主催の春季公開講演會は六月十五日午後一時より本學講堂に於て開催。始に野上學務部長の挨拶あり、次で講演に入る先づ稻葉敎授親鸞敎學が客觀性を持つ眞實の敎であり、この「眞實」とは、非道を道とする事によつて全く客觀性を持たぬ「僞」や、客觀性を主觀的に卽ち自己に求めんとする「假」に對して、彼岸的なものの、中にある超越的眞實であることを指摘、更にかかる眞理性への三つの段階として、常住なる法としての大無量壽經の眞實性と、本願爲宗名號爲體としての彌陀法と出世の大事とを擧げられ、我々と同じ形をとつて出世された釋尊の念ぜられるのは彌陀法であり、又釋尊と同じ形をとつて生れた、十方衆生が念ずるのも彌陀法である。卽ちそれは、我々の自覺の上に實證されて行くのであつて、其處に至心、信樂欲生の第十八願——救濟が成立すると述べられた。次で野田氏は、近代より現代に至る思潮を一つは科學を基盤とする世界觀と、他は生命又は宗敎的倫理的實存を基調とする見方と、の二つに區分され、前者に於てはニュートン・ガリレイ等の科學にみられる如き、世界の無目的性の發見、人間の自主性の强調となり、更に社會現象、人間環境、歷史、國家をも人口的なものとして考へ、革命を肯定するに至る。この科學主義への反抗としてのパスカルの孤獨の思想、ルツソーの自然主義、ドイツ觀念論に於ける汎神論傾向、又世界と人間との統一を求める生の哲學等に迄說き及んで包括的な概觀を試みられた。

終つて、委員池田助敎授挨拶。四時盛會裡に終了した。